

1. デジタル化と産業構造の変化に対応した法制・税会計制度の現状と課題

研究代表者： [篠田 剛（経済学部）](#)

デジタル化と産業構造の変化に対応した法制・税会計制度の現状と課題を整理・検討することを目的に、租税法、会社法、会計学、財政学研究者等による研究会を定期開催してきた。1回の事前研究会を含む計5回の研究会では、プロジェクトメンバーの研究報告だけでなく、英国の大学から研究者を招聘しての国際研究交流も行った。特に国際課税や外国税制に関して多くの研究報告があり、デジタル化と産業構造の変化の中で法制・税会計制度が対応を迫られている問題について、最新の知見を共有することが出来た。若手育成の面でも、研究会には継続的に6～8名程度の大学院生の参加があり、研究会での議論や研究交流を通じて院生の研究水準の向上に貢献することが出来た。また、研究成果の発信や社会貢献の面では、プロジェクトメンバーによる書籍の出版と国際研究交流の点で一定の貢献があったと考える。一方で、プロジェクトメンバーの専門領域を中心とした問題の洗い出しの段階に留まっている点は依然として課題である。今後は、メンバーの個々の実績を積み上げるだけでなく、多様な専門分野の研究者によるプロジェクトの強みを生かし、特に交錯領域に焦点を当てたプロジェクトとしての成果を意識していきたい。また、本プロジェクトで築いた海外の研究者との研究交流を発展させ、国際共同研究や共同の成果発表につなげていきたい。

2. 再生可能エネルギーへの投資・消費行動に関する実験・実証研究

研究代表者： [島田 幸司（経済学部）](#)

これまで本研究グループでは、

- 1) 再エネ供給に応じた需要形成のためのメカニズム（ナッジやプライシング）、
- 2) 消費者の賦課金負担の問題から固定価格買取制度(FIT)が縮小過程にあるなかでの再エネ投資行動変化、
- 3) 電力取引市場と連動するフィードインプレミアム制度(FIP)のタイプ（固定プレミアム、変動プレミアム）別にみた再エネ投資への影響、
- 4) 先進国・途上国における再エネ促進制度(FIT, FIP, RPS（再エネポートフォリオ基準））の再エネ発電施設増大への効果、

などを経済実験や計量分析により研究を進めてきた。

以上の研究の遂行により、再エネ市場・制度のデザイン手法、とりわけポスト FIT 時代の制度設計手法の創出に貢献できたと考えている。

3. 新たな国内国際経済環境下の日中経済協力 —中国東北を中心にして—

研究代表者：[高屋 和子](#)（経済学部）

2024 年 8 月 26 日に東北財経大学において、東北全面振興研究院との共催で国際学術シンポジウム「東北全面振興と『双循環』新発展局面」を開催した。本シンポジウムはアジア・日本研究推進プロジェクトと、本社会システム研究所奨励研究プロジェクトからも経費支援を得て開催した。研究メンバーが報告を行うとともに、若手研究メンバーである許僕塵、DONG Jiaqi、XU Yurui が翻訳通訳を務めるほか、シンポジウムや後述の調査に参加し研究ネットワークの拡大、知見の獲得に努めた。また 8 月 27 日には金普新区管理委員会、長興島開発区管理委員会、日系企業を訪問し、調査を行った。シンポジウムと調査については、『社会システム研究』51 号に調査報告として発表予定である。本プロジェクトはアジア日本研究推進プログラムでの研究と連動しており、これら研究成果をまとめて、英語での出版を計画している。

4. 近代ウィーン社会における文化芸術の社会経済史

研究代表者：[大塩 量平](#)（経済学部）

本研究では、近代ウィーンにおける郊外の自然散策や遠足の広がりや産業化を社会経済史的に議論した。ウィーン近郊の山域への遠足は、18 世紀後半から都市上層や中流層に広まり始める。当初はそのアクセスしにくさから都市生活と異なる農村の雰囲気を楽しむ「非日常的」体験として習慣化していった。だが 19 世紀半ば以降、交通機関の発達により徐々に性格を変えていく。本研究はその様相を都市史研究の観点から、19/20 世紀転換期のウィーン北郊の眺望に優れた山域、カーレンベルクへの遠足の広がりに着目し、その商業的営みを主導したカーレンベルク鉄道会社の営業報告書を用いて議論した。1870 年代以降のウィーンの経済発展や都市拡大、市内鉄道の発達に合わせ、カーレンベルク山に向かう登山鉄道や山上の高級ホテルが同社により経営される。特に市内交通との一体性の向上が追求された。その結果、従来は「非日常的」な営みだったカーレンベルク行楽は、20 世紀初頭、ウィーン市内の中産市民的様式で洗練された「日常的」な都市文化の延長としての性格を帯びるようになる。こうして、同所は都市市民の郊外山域での行楽のハードルが下がると共に、ウィーンに来訪する外部の観光客向けのツーリズムの場としての役割をも持つようになった。

5. A Study of the Inequality-Innovation Nexus

研究代表者：[LEE Kangkook](#)（経済学部）

The purpose of this research project is to examine the complex relationship between inequality and innovation. In 2024, I have developed my research by developing a theoretical framework and conduct empirical analyses. I wrote several papers and articles about the effect of income inequality on economic growth broadly, including several channels such as innovation, and specific policy measures like global wealth taxation, too. I published a few papers in academic journals and book chapters. Also, I made a presentation of this research at several

international conferences and seminars, about the negative impact of inequality on the economy, lowering the birth rate, and also about the role of new macroeconomics to reduce the current serious inequality problem. Overall, my research results are satisfactory though one year is still too short for me to work on a book about this research topic.

(和文) この研究プロジェクトの目的は、不平等とイノベーションの複雑な関係を検証することです。2024 年、私は理論的枠組みを構築し、実証分析を行うことで研究を発展させてきました。所得格差が経済成長に及ぼす影響については、イノベーションなどいくつかのチャンネルを含めて幅広く論じ、グローバル富裕税制のような具体的な政策手段についても、いくつかの論文や記事を執筆しました。いくつかの論文を学術誌や本の章に発表した。また、いくつかの国際会議やセミナーで、不平等が経済に与える悪影響や出生率の低下、現在の深刻な不平等問題を軽減するための新しいマクロ経済学の役割などについて、この研究のプレゼンテーションを行いました。全体として、私の研究成果は満足いくものであったが、この研究テーマに関する本を執筆するには、1 年という期間はまだ短すぎる。

(以上)